

# 加古川の水辺を活かした地域のにぎわいづくり

梶本 秀樹<sup>1</sup>

<sup>1</sup>姫路河川国道事務所 調査課 (〒670-0947兵庫県姫路市北条1-250)

加古川では、かつて見られた良好な環境の再生及び生物多様性の回復を図る自然再生事業を行っている。河川環境を保全・再生には、住民・住民団体、自治体等と連携し、人と川とのつながりを再構築していくことが求められる。姫路河川国道事務所が実施した住民・住民団体、自治体等と連携した地域のにぎわいづくりについて報告する

キーワード ミズベリング、地域連携、自然再生事業、にぎわいづくり

## 1. はじめに

かつて人々は、日々の生活の中で川からの恩恵を受けるとともに洪水の脅威にさらされる等、川と密接に関わってきた。しかし、高度経済成長期以降、河川整備が進むことによって洪水被害が減少した反面、川に対する恐怖心が薄れ、都市化の進展に伴う水質の悪化などが相まった結果、川の存在は人々の日常の意識から遠ざかっていった。その結果、人々がこれまで手を加えながら守ってきた地域の川の環境や文化、地域で協力して洪水を防いできた水防活動、川の恩恵とともに造られてきた川辺の街並みや賑わいなどの人と川とのつながりが多くの地域で消えつつある。それに伴い、河川環境が単純化し、生物の生息・生育・繁殖環境として機能が低下している。日常において川は、生物の生息環境として貴重な自然を有する場であり、人々が生活のために利用する場でもある。そこで、加古川では、かつて見られた良好な環境の再生及び生物多様性の回復を図る自然再生事業を行っている。自然再生事業では、わんど、たまり、礫河原等の生物の生息・生育・繁殖環境として機能をもつ箇所の再生を行い、人と川とのつながりを再構築するために、整備後の維持管理は住民・住民団体、自治体等と連携するとしている。加えて、災害が甚大化している時代だからこそ、川との新しい関係性を築き、地域の顔となる水辺づくりであるミズベリング等を実施することが求められている。ミズベリングとは、かつての賑わいを失ってしまった日本の水辺の新しい活用の可能性を創造していくプロジェクトであり、「水辺+RING（輪）」「水辺+R（リノベーション）+ING（進行形）」の造語である。水辺に興味を持つ市民や企業、そして行政が三位一体となって、水辺とまちが一体となった美しい景観と新しい賑わいを生み出す取り組みである。全国の河川では、ミズベリングによるオープンカフェやキャンプ等が実施され、水辺の新しい活用方法の発見及び人と川とのつなが

りが再構築されている。本論文では、姫路河川国道事務所が実施した住民・住民団体、自治体等と連携した地域のにぎわいづくりについて報告する。

## 2. 加古川の諸元

加古川は、兵庫県朝来市山東町と丹波市青垣町の境界にある粟鹿山(標高962m)を源流に、途中、篠山川、杉原川、万願寺川、美囊川など多くの支川を合わせて播磨灘に注ぐ全長約96km、流域面積約1,730km<sup>2</sup>の兵庫県下最大の一級河川である。(図-1)

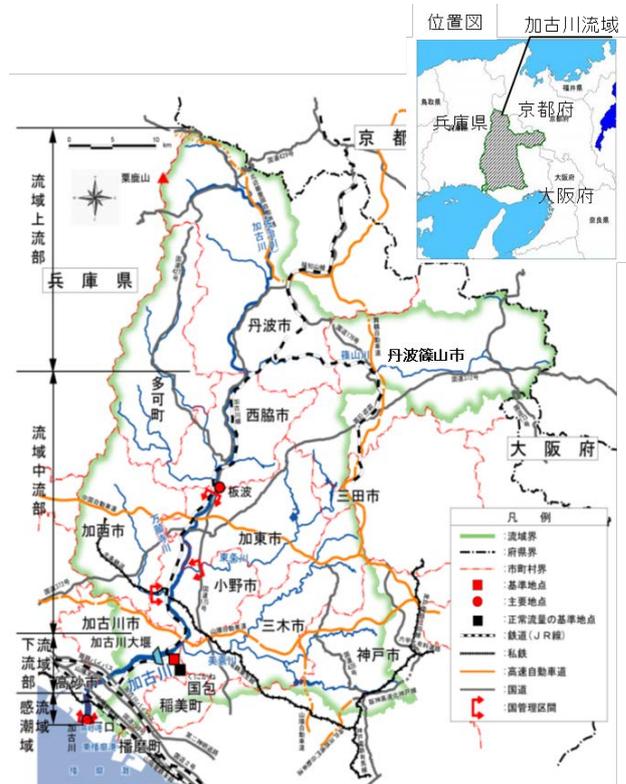


図-1 加古川の流域概要

### 3. 加古川が持つ水辺活用のポテンシャル

加古川流域内の人口は、約62万人であり、人口密度は、362人/km<sup>2</sup>である。流域内の交通は、山陽新幹線、JR山陽本線、山陽電鉄本線等の鉄道や、山陽自動車道、中国縦貫自動車道、国道2号、国道250号、加古川バイパス等の道路が加古川を横断するとともに、JR加古川線、JR福知山線や北近畿豊岡自動車道、国道175号が加古川沿いに並行している。流域の中流部では、染色・金物・そろばんなどの地場産業が発達し、河口部では播磨臨海工業地帯の一角として重化学工業が盛んである。

また、2019年度に下流部の河川公園の利用者へ加古川の河川公園の環境に関するアンケート実施した結果(図-2)では、加古川の河川公園は、景色・自然・公園などの河川環境、マラソン・ランニング、散歩などのスポーツなどについていい印象をもっている事がわかった。しかし、トイレ、木陰、休憩場所がないことについては、あまりいい印象を持っていない事がわかった。また、5章「ミズベリングプロジェクト「カコカフェ」」で実施したアンケート(図-3)では、加古川で実施して欲しいイベントとして、スポーツ（SUP、球技）、グルメ（フードフェス、出店）、環境整備（ドッグラン、インスタ映えスポット）、お祭り、その他イベント（仮装ウォーク、婚活パーティ）などの回答が上位にあり、加古川において、多くのイベント開催が望まれている状況である。このように、加古川は、アクセス性が高く、加古川の水辺を利用したイベント開催には需要はあることが考えられる。



図-2 河川公園の利用者へ実施したアンケート (n=150)

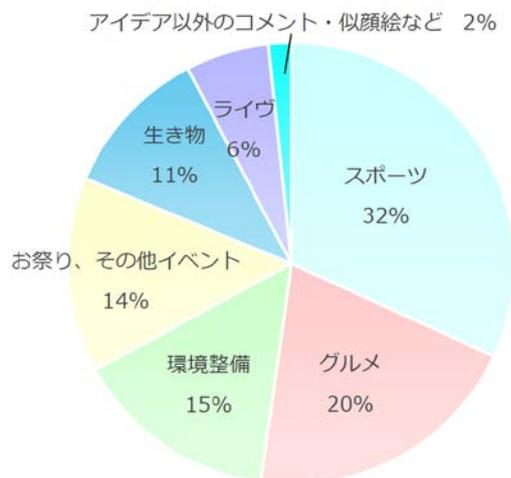


図-3 カコカフェで実施したアンケート結果(n=182)

### 4. 加古川での水辺活用の展開

現在、加古川の自然再生事業として、2013年度に策定した「加古川自然再生計画書」に基づき、わんど・たまりの再生を行っている。再生したわんど周辺の植生は、ヤリタナゴやカワヒガイ等のわんど・たまりの代表種の生息に関連するヨシや加古川固有種であるフジバカマ等で構成される植生環境を基本としている。また、地元住民等と連携し、再生したわんど・たまりのモニタリングを実施することとしている。フジバカマとは、キク科の多年草であり、秋の七草のひとつである。8月から10月にかけて、淡い紫紅色の花を咲かせる。かつては、日本各地の河原に群生していたが、河川改修による土壌の供給量の低下、セイタカアワダチソウなどの外来種との競争の結果、フジバカマの個体数は減少し、現在、環境省のRDBには、準絶滅危惧種として登録されている。再生したわんど周辺の植生をフジバカマ等で構成するためには、地元住民等と連携したモニタリングが必要である。本章では、自然再生事業により再生したわんどに地元企業がCSR活動として行っているフジバカマの植栽活動及び自然再生事業と連携した地元による水辺整備について報告する。

#### (1) 地元企業のCSR活動

##### a) 経緯

加古川沿川に工場を構える地元企業は、全国各地の工場で行う貴重種、絶滅危惧種の保全・保護のCSR活動を、加古川工場においても実施するため、CSR活動対象となる種について、地元企業の緑化活動アドバイザーであり、加古川の自然再生事業のアドバイザーでもある学識者へ相談を行った。学識者は、1980年代までは加古川の各地で確認できたフジバカマの栽培及び加古川の自然再生事業で再生したわんど周辺への植栽を提案し、フジバカマの株を提供した。学識者からの提案を踏まえ、地元企業と姫路河川国道事務所が調整した結果、2014年度より、地元企業のCSR活動によるフジバカマの植栽活動が始まった。



図-4 開花したフジバカマ

**b) 実施内容**

2014年度から毎年春に、フジバカマ30株程度を自然再生事業により再生したわんどに植栽を行った。また、植栽だけでなく、定期的な維持管理として年1回の施肥、年3、4回程度の除草を行っている。なお、河川管理用通路からCSR活動箇所までは遠く、不便であったため、2016年度に活動箇所を変更した。(図-6)また、地元企業は2019年10月に、加古川工場のフジバカマ及び加古川河川敷に植栽したフジバカマの状況を確認する「フジバカマ観察会」を開催した。フジバカマ観察会には、NPO団体や近隣企業の方々のほか、フジバカマの植栽を提案した学識者も出席した。学識者によるフジバカマに関する講話では「地元企業の協力がなければ加古川のフジバカマは絶滅してしまっていたと言っても過言ではない。」と地元企業のCSR活動を評価している発言もあった。そのほか、地元企業は、DNAの保存の観点から、2019年度以降、行政及び加古川商工会議所に所属する企業へ加古川工場で栽培したフジバカマの株の提供を行っている。

**(2)連携した地元による水辺整備**

**a) 経緯**

2019年度の自然再生事業予定箇所は小野市住永地区であった。当該地区の周辺には、堤防の側帯として設けられた4kmのおの桜づつみ回路及び桜が水田の水に反射し映る逆さ桜が有名であり、春になると市内外からの観光客であふれる場所となっている。姫路河川国道事務所では、前節の地元企業によるフジバカマの株の提供を踏まえ、当該地区のわんど・たまり再生にあわせた周辺のフジバカマ植栽を検討していた。しかし、フジバカマの維持管理には住民等の協力が必要であったため、地元行政



図-5 CSR活動の様子



図-6 CSR活動箇所

である小野市に相談を行った結果、フジバカマの維持管理に協力していただける団体が見つかった。そのため、当該地区で実施するわんど・たまり再生にあわせ、わんど・たまり周辺へのフジバカマの植栽を行う事となった。

**b) 実施内容**

フジバカマの植栽実施箇所は、図-7に示す場所で行った。はじめに、植栽箇所周辺のゴミ回収、除草を行った。次に、フジバカマが根付くよう、植栽箇所周辺の土壌を柔らかくし、肥料とを混ぜた。その後、プランターからフジバカマを取り、植栽を実施した。

地元企業からいただいたフジバカマは80株のうち、植栽に用いたのは20株とした。なお、残りの60株については、小野市が管理する花壇において育苗を行い、個体が大きくなった2年後に株分けを行う予定である。以降、株分けによって増えたフジバカマの個体は、毎年加古川に植栽する予定である。(図-9)



図-7 植栽実施箇所



図-8 植栽活動の様子

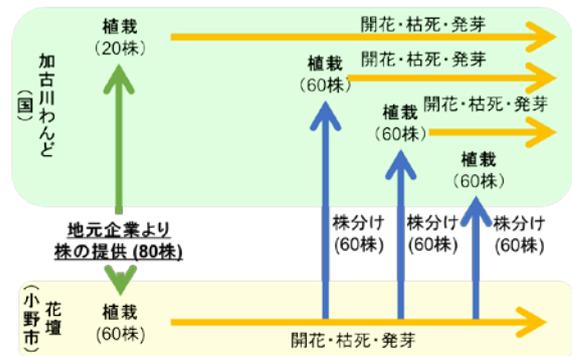


図-9 フジバカマの植栽フロー図

**(3) 今後の予定**

1節の地元企業がCSR活動に育てたフジバカマを自然再生事業により再生したわんどの周辺に植栽し、モニタリングすることで、良好な環境が再生されている。また、CSR活動の実施箇所から下流側では、フジバカマが自生していることが2019年度に確認されている。また、2014年度からの産官学が連携したCSR活動が継続された事により、2節の地元と連携した水辺整備が行われている。当該地区は、桜つつみ回路や逆さ桜などの見所があり、春には市内外からの観光客であふれている。しかし、他の季節は、観光客が少ない。そこで、加古川と小野市を活性化するため、地域の景観、文化及び観光基盤などの「資源」や地域の創意に富んだ「知恵」を活かし、企業及び地元住民と河川管理者の連携の下、実現性の高い水辺の整備・利用に係る取組みを定める「かわまちづくり」の計画の策定に向け、協議会等の準備をすすめているところである。また、今回の植栽活動がかわまちづくりと連動し、春以外でも見所がある場所となり、当該地区が活気づき、さらなる地域発展が期待されている。

**5. ミズベリングプロジェクト「カコカフェ」**

本章では、姫路河川国道事務所管内の加古川においても、ミズベリングを展開するために2019年度に実施したミズベリングキックオフイベント「カコカフェ」について報告する。

**a) 経緯**

一般に、ミズベリングのキックオフイベントとして開催されるのは、ミズベリング会議である。ミズベリング会議とは、講演会や、ミズベリングに関心がある市民や企業、行政が参加し、水辺の賑わいづくりについてのワークショップを行う会議である。加古川管内においてミズベリングを展開するため、ミズベリング会議を開催することを検討した。しかし、調整に時間がかかるという課題があることから既存イベントにあわせたキックオフイベントを開催とすることとした。

加古川では、5,000人規模の既存のイベントが開催されている。そこで、加古川での開催される既存イベントの飲食ブースを「カコカフェ」という統一の名前及びロゴマークを作成し、ブランド化することで、地域での知名度アップやイベントを盛り上げることによるミズベリングキックオフイベントを開催することとした。



図-10 カコカフェのロゴマーク

**b) 関係機関との調整**

第31回加古川マラソンの主催者である加古川マラソン大会実行委員会事務局へ、「カコカフェ」の設置について相談したところ、毎年スタート・ゴール地点の近くに、飲食エリアが設置されるとの回答があった。その回答を踏まえ、再調整した結果、加古川でのイベントの飲食ブースの「カコカフェ」とし、加古川マラソンを盛り上げるため、例年設置されない椅子やテーブルなどの配置及び装飾などを姫路河川国道事務所が実施することとなった。また、カコカフェ内には、ミズベリングPRブースを設置することとなった(図-11,12,13)。

**c)カコカフェでの活動**

加古川マラソン当日、加古川マラソンの来場者へのアンケート及び全国のミズベリングPRの2つを実施した。来場者へのアンケートは、カコカフェのエリア内に出店された名物グルメに舌鼓を打つ一般の方々に、「加古川でミズベリングをするなら何をしたいですか?」という問いに対する答えを、付箋に書いてもらい、ミズベリングPRブースにあるアイデアボードに貼ってもらう方法を行った。ミズベリングPRでは、ミズベリングPRブースのアイデアボードに付箋を貼りに来られた方々へパネルを用いて全国のミズベリングの事例紹介をし、ミズベリングについてPRを行った。



図-11 カコカフェの配置



図-12 カコカフェの様子



図-13 ミズベリング PR ブース

### 3) カコカフェでの活動結果

アイデアボードには、来場者へのアンケートで実施した地域住民や他府県から来られた方々の約180種類の様々なアイデアがあり、加古川がもつポテンシャルについて再認識することができた。

また、全国のミズベリング事例紹介では、参加者から「河川でこんなことができるとは知らなかった。」、「そもそも、河川で何ができて、何ができないのかが知らなかった。」、「河川では、BBQが禁止されている印象があり、基本的になにもできないと思っていた。」などの話があった。また、他河川でSUPボートの講習会を行っているという方もいた。さらに、加古川マラソン以降に、ミズベリングに関する問い合わせがあった。



図5. アイデアボード

その中には、加古川においてミズベリングを行うため、実施内容や時期、場所といった具体的な内容についても併せて相談いただいた。問い合わせ者は、加古川マラソンに参加し、カコカフェエリアにあったミズベリングPRブースでミズベリングの存在を知り、問い合わせたとの事だった。

### 6. まとめ

以上より、過年度から実施してきた加古川の自然再生事業を活かした地域の賑わいづくりの取り組みについて報告したが、いずれも地方自治体及び地元の協力が不可欠であった。今後もこれらの活動を続け、地域のにぎわいづくりに取り組んでいく。また、これらの取り組みが派生、連携する事で、新規の地域のにぎわいづくりへと展開することも考えられる。そのためには、河川管理者は、にぎわいづくりに関する情報発信を行い続ける必要がある。第4章第3節については、今回の地元との連携がよりよい方向に派生し、これからのかわまちづくりにおける地元、企業及び自治体との連携の基礎となり、当該地区の発展になることが望まれる。

今後も、地域連携につながる加古川の自然再生事業を実施し、河川環境の保全・再生に取り組む。